



学校教育研究科
道徳教育専攻 修士課程
1期生 修了の皆様へ

「歌ごころ」を持つ

麗澤大学大学院学校教育研究科

研究科長 井出 元

待望の第一期修了生六名を送り出すにあたり、公私にわたる本職と不断の「好学心」をもって院生としての研究生活を全うされたことに対して、心より敬意を表したいと思います。しかし、その研究成果は世の中に受け入れられ、教育界に貢献するものであろうかという老婆心と、いよいよ本学の真価が問われるのだといういい知れない緊張感を覚えています。そして、十分な学習の機会と研究の場を提供し得たであろうか、果たして充実した院生としての研究生活を送っていただけたであろうかと思いを巡らせた時、万事を尽くしてもなお「満ち足りぬ心」を抱いていることも事実です。

修了される皆様に対して、私の大切にしている恩師の言葉を紹介し、**はなむけ**としたいと思います。

麗澤大学に在学中、当時の学長廣池千英が、大和路の石碑に刻まれている「百歳の戦をなさん春は来ぬ 世の民草よ歌ごころあれ」という和歌を引用し、「**歌ごころ**」（おおらかな、ゆとりのある心構え）を持たなければ大成しない・・・」と訓示し、さらに、次のように語りかけました。

お互いの人生は等しく「百歳の戦」（ももとせのいくさ）をしているのだと思うのであります。百年戦争をしているのであります。そこで、お互いが自分の天分でありましてころの職業そのものに、朝から晩まで緊張しきって、張り切っておったのでは早く倒れてしまうと思うのであります。弓の弦は張りっぱなしですとプツツと切れてしまいます。やはり時には、はずしておかなければ、いざという場合に役にたたないのであります。そこで、いつでもこのゆとりのある、余裕をもっているということが肝心であります。皆さん方はその天分を発揮するためにうんと努力してありますが、その努力されている中におきまして、やはり常に何か精神的な余裕をもっているということが、非常に私は重要なことだと思っております。

まずは、自修研鑽されたこの二年間を振り返っていただき、自らの教員・研究者としての資質・能力の向上に「よろこび」を味わっていただきたいと思います。そして、「歌ごころ」を持って、今後ますます道德教育のよりよい在り方を模索し、教育界に貢献していただくことを楽しみにしています。

一路平安

※参考『廣池千英選集』第三巻



学校教育研究科第一期修了生のみなさまへ

堀内一史

第一期生の皆さま、修士課程の修了、誠におめでとうございませす。心よりお慶び申し上げます。

新型コロナウイルスをめぐる危機管理上の配慮から、修了式も謝恩会も中止となり、残念な限りです。私が担当させていただいた「海外の道德教育」は集中講義であったためわずか6回の授業担当でしたが、第一期生のみなさまのことは、それぞれ個性豊かな方ばかりで、私の心にしっかりと刻まれています。

教育畑で長年教鞭を執り管理職を経験後その成果の集大成のために本大学院で学ばれた方や現職の教員として本格的に道德教育について考えるために門を叩かれた方、あるいは教育者として、主婦として、人生の礎となる道德を再度捉えなおそうと遠方より通われた方など、さまざまな思いが縁で、短い間でしたが、相互に学ぶことができました。

担当させていただいた講義内容は、植民地時代から現代までのアメリカの宗教教育・道德教育について歴史的にたどり、テキストやスライドを使いながら、その都度教育理論や実践を紹介するというものでした。当然ながら、日米文化の相違から単純な比較は難しく、ご自身の研究や教育実践にとって役に立ったかどうか不明ではありましたが、皆さまの真剣な姿勢に、むしろ私自身、学ぶところが多々ありました。

講義の準備には苦勞しましたが、真剣に取り組んでくださり大変報われました。アメリカの道德教育はマイナーな領域であるため、例えば、経済学や経営学とは異なり、邦訳されたテキストがまだありません。というより、テキスト自体が少ないのです。体系的な道德教育史というものが無いからだろうと推察いたします。ですから、初年度はテキストの関連する章を1年かけて自分で翻訳して資料を作成しました。こなれた文章ならまだしも、難解な訳文でかえってご苦勞を掛けたかもしれません。それにも関わらず最後までついていただき、有難うございました。

2018年度はフィリピンのパペチュアル・ヘルプ大学と「感謝」について共同研究を行いました。関心を示された受講生がおられ、1回の授業をその共同研究に割いたことを覚えています。ご自分でも友情について学校で調査をされたと聞きました。お役に立ててうれしく思います。共同研究の方は、今年2月にその調整も兼ねて出張する予定でしたが、新型コロナウイルス流行を懸念して中止となりました。来年は一区切りをつけたいと思います。

道德は我が国日本の将来の礎を築く大切な教科です。しかしながら、教科としての道德を担当する教員の養成や専門的に研究する人材の育成が喫緊の課題とされています。そんな中で、麗澤道德教育学会が発足しました。本研究科を修了されても、同学会において引き続き研究成果を発表いただき、我が国の道德教育の発展に寄与されることを願っております。



初めてのご卒業を迎えて

岩佐 信道

麗澤大学の大学院、学校教育研究科が発足して最初の大学院生となられた皆さん、この大切な時期に、麗澤で学ぶ決意をされたことに心から感謝を申し上げたいと思います。そして皆さんとこのような出会いの機会をもてたことを心からうれしく思います。

思えば、この2年の間に、時代は平成から令和へと変わり、最近では、新型コロナウイルスが世界的に猛威をふるって全国の小中高が一斉に休校となるなど、歴史的な出来事がありました。

しかし、いずれにしても皆さんと一緒に道德教育を学んだこの2年間はすばらしいものでした。皆さんがこれから進む道は、それぞれ違うとしても、この麗澤での2年間は、これからの人生において、大きな活力となり、指針となるものと思います。麗澤で共に研究を進めた同士として、手を携えて、日本の道德教育の前進のためにがんばりましょう。

ところで、私は、麗澤大学で行われる道德教育の授業では、廣池千九郎が創立したモラロジーに基づく道德教育の在り方について取り上げることが重要と考えるようになりました。中には、「このような内容を勉強するために麗澤にきたのではない」という考えの方もあったかもしれません。しかし、私が大学院発足の直前に、学会誌『道德と教育』第336号に「三方よし」と「相互依存ネットワーク」— 道德性発達研究の新しい展開のために — という拙い文章を書いたのもそのような考えからでした。

そして大学院がスタートして、私が主査として関わることになった坂口さんと松原さんの修士論文には、私のそのような思いを見てとることができます。たとえば、坂口さんは、その研究の大仮説として「広い視野から道德的価値を捉えた道德授業を進めていけば、児童生徒の道德性の発達を促すことができるであろう」ということを掲げましたが、それは「人間の生き方を、自然や地球全体をも含むすべての存在との関わりでとらえる「相互依存のネットワーク」の考え方をふまえたものでした。また、松原さんは、公立小学校の校長として、毎週行う校長講話を廣池千九郎が実践した「三方よし」という考え方を基本として展開しました。

特に松原さんの校長講話の実践的研究には、坂口さんを含めて私たち3人が取り組んだ1つの思い出があります。松原さんは、児童が自分の校長講話をどのように受け止めたかを2つの方法でとらえましたが、その1つが、校長講話について児童が書いた自由記述でした。私は、この自由記述こそ、研究的に大きな意味があると考え、その具体的な扱い方を松原さんと検討しました。その結果、児童の自由記述を「三方よし」という校長講話のねらいの観点から位置づける5段階尺度を作成することができたのです。そして、その尺度の信頼性を確かめることができたのは坂口さんの協力のおかげでした。こうしてできた5段階尺度のものさしによる評価によって、児童たちが、校長講話に込められた校長の意図をしっかりと受け止め、生活に生かそうとしていることがはっきりしたのです。しかも、その結果は、比較のための近隣小学校における児童の反応とは明らかに違っていたのです。

お二人の研究内容は、学校における今後の道德教育の展開に大いに役立つものと考えます。このような形で、大学院における皆さんの研究に関わることができたことを心から有り難いことと思います。



小規模にこだわる。国際性にこだわる。

麗澤大学
Reitaku University

理論と実践の往還による道德教育学の樹立という歴史的使命

高橋史朗

大学院修士課程のご卒業誠におめでとうございます。口頭試問では厳しいコメントや質問が詳細にわたって行われたと思いますが、研究者の仲間入りのためのセレモニー的な意味もあったと思います。

顧みますと、私の授業は皆さんが選んだ詩を皆さんに朗読していただき、その理由について述べた後に自由懇談という形でスタートし、毎授業、多くのプリント資料を配布して進めてきました。半期の授業で配布した資料は膨大な量になりましたが、しばらくは保存していただき、時々引っ張り出して振り返っていただければ幸いです。

教育現場で道德教育の実践を積み重ねてこられた皆さんと議論を重ねることができたことは私にとっても貴重な研鑽の場でした。私自身は大学院生の時に3年間、高校で倫理社会の非常勤講師をしたこともあり、教育現場の実践と理論の往還が大事だと考え、臨床教育学研究を志したので、脳科学等の科学的知見に関する理論的研究を道德教育の現場にどう生かすかが最大のテーマでした。

昨年2回、日本道德教育学会で研究発表しましたが、学会全体として道德教育の理論的研究が少ないと思いました。道德の教科化に伴い、道德の教科書はできましたが、道德科の目標を中核とする道德科教育学の理論構築と道德教育の内容・方法の再構築が時代の要請といえます。

私がこのことを最初に意識したのは、平成19年4月17日に政府の教育再生会議第2分科会(規範意識・家族・地域教育再生分科会)の有識者ヒアリングに招かれ、早大の安彦忠彦教授、理化学研究所脳科学総合研究センターの津本忠治氏と共に、「脳の発達段階に応じた徳目の内容と方法」等について教育再生会議委員と議論する機会に恵まれたことでした。

この有識者ヒアリングを踏まえて、同年6月に教育再生会議第2次報告が発表され、「国は脳科学等の科学的知見の積極的な普及啓発を図り、今後の子育て支援に活用する。・・・それらの知見を踏まえ、子供の年齢や発達段階に応じて教える徳目の内容と方法について検討、学校教育について活用することを検討する」と明記されました。

これを受けて平成21年に文科省の「子どもの徳育に関する懇談会」が子供の年齢、道德性の発達段階に応じた道德教育の在り方について報告書を公表しましたが、同懇談会に寄せられた教育諸団体の意見書の共通点は、「家庭からの道德教育」の要請でした。

文部科学省は平成16年から10年以上の年月をかけて、「情動の科学的解明と教育等への応用」の重要性を検討会、調査研究協力者会議を立ち上げて訴えてきたにもかかわらず、道德教育の理論と実践に生かそうという動きはほとんど見られませんでした。

この点を反省し、理論と実践の往還による道德教育学の樹立を目指して、麗澤大学道德教育学会がそのパイオニアとなり、皆様がその中核的役割を果たされることを強く期待したいと思います。道德教育の現場に身を置きながら道德教育研究に打ち込んできた皆様にしかできない歴史的使命がそこにあるのではないのでしょうか！



本当の意味で学びを楽しめるのは、これからです

特任教授 中山 理

2年間の麗澤大学院での生活、いかがでしたか。皆さんの修論発表を拝見しましたが、どなたも真摯に一所懸命、勉学に励まれたのだなという印象を覚えました。今後は、その成果を踏まえて、また新しい学びの段階にはいることとなります。すなわち、大学院在学中は指導教授の先生方から論文指導を受け、学問的な対話を重ねながら、論文にまとめ上げるとプロセスでしたが、これからは皆さんご自身で学びを深めていくことになるわけです。今までは水先案内人が控えておりましたが、これからは自らのオールで、学問研究という果てしない学びの海へと漕ぎ出すこととなります。その意味で、これからは真に主体的に学びを楽しむ時間のスタートと言えるでしょう。

現在、第四次産業革命が進行しつつあり、その影響を受けて学びのスタイルも大きく変わるかもしれません。しかし、不易流行というように、学びの基本的な態度には不易の部分もあるのではないかと思います。そこで過去の歴史を遡り、皆さんへのアドバイスとして3つの名言を送りたいと思います。

第一は、イギリスの哲学者フランシス・ベーコン (Francis Bacon 1561~1626年) です。ベーコンは、『随想録』の Of Studies の中で「読書は充実した人間をつくり、会話は機転のきく人間をつくり、書くことは正確な人間をつくる」(Reading maketh a full man; conference a ready man; and writing an exact man) という有名な言葉を残しています。やや抽象的なので、もっとわかりやすく申し上げれば、「充実した人」というのは「蘊蓄のある知性豊かな人」、「機転のきく人」とは「鋭敏で、当意即妙の受け答えができる人」、「正確な人間」とは「正確な知識をもつ人」を意味します。ベーコンがこの名言の筆頭に「読書」を持ってきたことからわかるように、古今東西、ひとかどの人物と言われる人は、必ずといってよいほど読書の習慣を大切にしています。これから文字媒体がどう変化しようと、どのような情報革命が起ころうと、まさに「読む」という行為が知的生活の中心になるという構図に大きな変化はないでしょう。

第二は、「話した言葉は飛び去るが、書かれた文字は残る」(Verba volant, scripta manent) というラテン語の格言で(ローマ皇帝ティトゥスの演説から)、これは恩師の故渡部昇一先生からのアドバイスでもあります。先ほどベーコンが書くことで正確な知識が持てると述べていますが、それだけでなく情報の伝達という点でも文字にした方がはるかに有効です。わかりやすい一例をあげますと、学会や研究会で口頭発表したものは、アナログでもデジタルでもよいから、文字として残しておきなさいということです。

最後は、『論語』の「これを知る者はこれを好む者に如かず。これを好む者はこれを楽しむ者に如かず」という孔子の名言です。「知る」とは、単に知識を得ることですが、それよりも知ることを「好む」という積極的な意思のあるほうが上であり、ただ単に好きだという意味があるだけよりも、それを主体的に「楽しむ」ことの方が上だという意味です。自らが学びを楽しめるかどうか、その学びを持続できるかどうかの決め手になるということでしょう。皆さんは、これから大学院の講義や修論作成などの外的な縛りは何もなく、自らが主体的に学びを「楽しむ」段階にはいります。今や、人生100年の時代だといわれています。65歳で定年になっても、100歳になるまでには10万時間もの自由時間があります。学びを楽しむ時間はたっぷりありますので、ドイツの文豪のゲーテも言うように「急がず、しかも休まず」(Ohne Hast, Aber ohne Rast) 心に余裕をもって学びを続けてください。



小規模にこだわる。国際性にこだわる。

修了生へのメッセージ

川久保 剛

道徳教育学を教科教育学として確立するために開設された大学院ですが、あっという間に二年間が経過し、完成年度を迎えました。

黎明期を支えて下さった第1期生の皆様方には、厚く御礼申し上げますとともに、今後のご研究の発展を心より祈念致します。

今後は「麗澤道徳教育学会」でお付き合いさせて頂くこととなりますが、引き続きどうぞよろしくお願い致します。

面白い研究成果が出ましたら、ぜひ、「麗澤道徳教育学会」で発表して下さい。

また学会誌『道徳教育学研究』への投稿もお待ちしております。

査読がありますから、全ての投稿論文が掲載されるわけではありませんが、掲載を目標に研鑽することで、研究能力は飛躍的に向上します。

論文執筆の過程でお困りのことがあれば、遠慮なく、指導教員にメール等で指導を依頼して下さい。

研究室のメンバーは、教員と現役の院生だけではなく、OB・OGも含めて構成されています。むしろ、OB・OGの方々の存在や研究が、現役の院生にとっては大きな励みとなり、目標となります。現役の院生を導いて下さるような精力的な研究活動をぜひ今後とも継続して下さい。

わたし自身は、今後、道徳教育としてのシティズンシップ教育の理論と方法について研究したいと考えています。

その研究に基礎を与えてくれるのが、和辻哲郎の倫理学いわゆる和辻倫理学だと思いますので、現在は、和辻倫理学の考察に取り組んでいます。

成果が出ましたら、「麗澤道徳教育学会」や『道徳教育学研究』で発表するつもりです。

今後も、ともに研究して参りましょう。

江戸の国学の大家、本居宣長が喝破したように、学問は道楽の王道です。どんな道楽よりも、学問の方が面白いに違いありません。

わたしたちは、この人生の秘密を知っているのですから、勝者です。

勝者には何もやるな、とはヘミングウェイの言葉ですが、何もなくとも、大いに学問道楽に邁進して参りましょう。



学校教育研究科道德教育専攻の修士課程修了、誠におめでとうございます。

ご卒業なさる皆様におかれましては、教育現場において重鎮のお立場でいらっしゃる方々であり、そのようなご多忙な日々において修士号を取得されるという大きな挑戦を乗り越えられたことに、深く敬意を表します。

修士の学位を修められ、今後、研究者を続けられるということは、世界の客観性とご自身の主観性の間で、その関係を探求する能力を身につけることが必要となって参りますが、そのためにも、皆様の修士論文の基となった皆様のビジョンを大切になさってください。「何のために研究するのか」という問いの明確化が、さらなる研究の鍵となるのではないかと思います。

そして、質的研究では、researcher as an instrument「研究者は研究のインスツルメンツ」である、という言葉が深く心に刻み研究に臨むことが重要といわれております。研究者として、ご自身の主観を客観的に省察し続けることで、それがより明確になります。そこに自己の視点や意味づけの仕方を知る面白味があるのではないかと思います。

今後とも研究者として共に常に楽しく学んで行きたい所存でございます。皆様の今後の益々のご発展を深くお祈り申し上げます。

麗澤大学 学校教育研究科 准教授 山下美樹



修了生の皆様へ（本研究科HPに掲載のエッセイをお祝いの言葉としてお贈りいたします）

道徳教育を担うということ

学校教育研究科 江島 顕一

本学に着任以来、建学以来(1935年)の最古の科目である「道徳科学」という必修の授業を受け持っている。また、教職課程を担当し、「道徳教育の研究」という授業を受け持っている。つまり私は、一方で入学して来たばかりの大学生に道徳を教えながら(年間30回)、他方で教員を目指す学生に道徳の指導法を教えている。道徳教育を研究する一大学教員として大変恵まれた環境に身を置いていると思っている。

しかし、前者の大学生に道徳を教えることについては、今日まで試行錯誤を重ね、そして今なお悩みや迷いが尽きない。すなわち、自分のような不道徳(非道徳)な人間が道徳など教えられるのか、あるいは教えていいのか、ということである。

日本教育史という学問領域を専門としていることもあって、こうした自らの問いを過去の先人たちに尋ねてみることにした。しかし、先人の言葉は予想に反して非常に厳しかった。例えば、大正期に隆盛した新教育運動の担い手であり、「合科学習」を主唱しながら、修身の教授改革を提起した奈良女子高等師範学校付属小学校の主事であった木下竹次(1872-1946)は次のような言葉を残している。

修養は学習者自身の仕事であるけれども、修養に優秀な指導者のあることは特に大切である。自分の修養は一向に之を顧みないで、徒に修身教授を実行して居るのは無頓着に過ぎるが、自分はずっと道徳の師と為ることが出来ないと卑屈退嬰の精神を起すのは思慮が余りに浅いと云はねばならぬ。

(『学習各論』上巻、目黒書店、1926年、481-482頁)

私は問い返してみたくなった。それでは道徳的な人間でなければ、道徳を教えることはできないのか、と。教師として聖人君子ではない。失敗や間違いもある。それは許されないのかと。常に正しくなければ教壇に立つ資格はないのかと。木下は続けて次のような言葉を残している。

吾々は誠実を以て人生に処することは出来る。又誠実を以て学習者に対することも出来る。

強烈なる求道心も持ち得る。現在は不完全であるが、今後に於て発展することは出来る。

道徳は何人も実行の出来るものである。道徳に不可能底の要求は無い筈である。

学習者と共に自分も修養せうと痛切に念ずれば、其処に修養指導の教師たる資格は具備する。

教師は修養の師となることが出来ると先づ自分が自分を信ぜねばならぬ。(同上、482頁)

こうした先人の言葉を学びながら、自問自答を繰り返してきた、現時点での私の回答はこうである。

道徳的でなければならないのではなく、道徳的であろうとする教師に、道徳を教える資格は具備する。

教師という存在は、must be ではなく、want to be であることが大切なのではないかと。

少なくとも私は道徳的な人間とは言い難いが、道徳的であろうと志向している人間ではある。そうした私の考えや思いに、これまで出会った学生たちは真摯に耳を傾け、真剣に向き合ってくれてきた。これからもこの問いは私が教壇に立つ以上、絶えず考え続けなくてはならないものであると思う。

道徳教育を担うということは、教師としての自らの在り方を常に問い直していくということに他ならないと考えている。



修了生の皆様

ご修了おめでとうございます。2年間、おつかれさまでございました。

お勤めを続けながら、また土曜日という限られた登校日の中で、課程を了えられた皆様に敬意を表しますとともに、心よりお祝い申し上げます。

皆様は、各分野においてすでに多くの実績をお持ちでいながら、さらに高みを目指されて麗澤大学大学院へ進まれました。この2年間というもの、日々、学問に勤しまれるだけでなく、自らの人間性を研鑽してこられたと拝察しております。

国づくりは人づくりであり、その鍵は教育にほかなりません。教育の根幹を成すものが道徳であり、よい教育にはよい研究あってこそ。そしてこれらはいずれも教員の優れた人間性に帰せられます。皆様はそれを体現してこられたといえるでしょう。

麗澤大学の創立者廣池千九郎は、道徳の内容を説明する方法として、百数十もの「格言」を考案しました。その中に、「徳を尚ぶこと学・知・金・権より大なり」というものがあります。

今、世界中の人々が財産と地位を築くために奔走し、教育もそれを前提として知育に偏重しているといわざるをえません。しかし、皆様はこうした潮流に抗って高い次元に「徳」の存在を見据え、「知徳一体」の建学理念とともに邁進されて、晴れてその成果を証するに至ったということになります。

この度、大学院を修了されて一段落されたわけですが、ぜひ本学に軸足を置きつつ、研究活動を継続していただきたく思います。麗澤大学道徳教育学会も設立されました。皆様の道徳力の源泉として母校は生き続けることでしょう。

そして、皆様に範をとった後進が続くことによって、麗澤大学自身も「道徳」の研究・教育の拠点として一層発展していくことになります。

道徳の研究と教育を推進することは、社会への大いなる貢献であるという認識のもと、これからもお励みいただければと存じます。

末筆ながら、皆様のご健康とご多幸を祈念申し上げます。

麗澤大学大学院学校教育研究科道徳教育専攻准教授

橋本富太郎



道徳教育専攻の院生の皆様は私の誇り！

～常に継続の努力と技、人間としての魅力、そして結果を求める姿勢～

鈴木 明雄

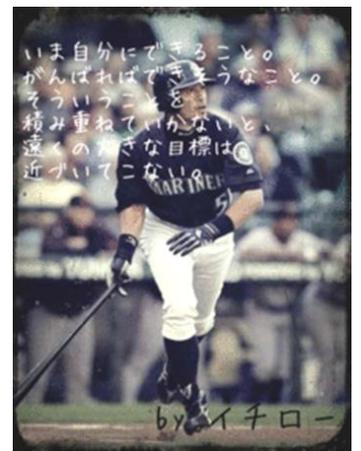
2年前に最初に入學された院生の方々とは、道徳教育専攻立ち上げ時では一緒に講義を受け、日々悩みました。いつもご自分の道徳教育への情熱や信念を信じて、素晴らしい研究成果を上げられました。今年度M1の方々も、同様に、やはりご自分の問題意識を大切に果敢に研究に取り組んでおられると日々感じております。その努力や信念、そして実践への執念は、大リーガーのイチロー選手のように思います。なぜか？

その話を最後に、ご卒業される院生の皆様へのはなむけの言葉とさせていただきます。

イチロー選手は世界に通じる高い技術で、大リーグで、年間200本安打を10年間や年間安打数世界1の記録達成など世界のスーパースターとなりました。プロ野球では、トリプルスリー「打率3割・本塁打30本・盗塁30回」が話題になっていますが、イチローは打率を気にしないと述べています。それよりも、安打数を今日何本、週何本、と目標を立て、積み重ねの努力をするのだそうです。目標の安打数に到達すれば、結果として打率も3割を越えているという考え方です。この考えは究極のプラス思考です。確かに、打率は上がったたり下がったりしますので、一喜一憂すると調子も下がる場合があります。地道にコツコツと目標を積み重ねていくことに価値を見いだすということには学ぶことが多いと思います。これは、道徳教育専攻の院生の皆様が、日々コツコツと安打を積み重ねておられる姿と一致します。打率は3割で一流、7割は失敗。先行文献検索の打率はもっと厳しいものだと思いますが、一滴の他者の考えがご自分のお考えと響き合って、素晴らしい考えに結び付くものと思います。

また、イチロー選手は、残念ながら引退しましたが、常に目標高く、自分が目指すプロとは50歳で4割打者。そして次のような人間を目指したいと言います。

- 1 観客を魅了する技術と力量があること
- 2 自他のチームの選手から魅了されること
- 3 成果として、結果を出すこと



この3つを、自分ならどうだろうかと読み替えてみるとなかなか厳しいものだと分かります。例えば、教師の皆さんであれば、“プロ教師”であるために、観客＝生徒たち、保護者や先生・地域社会の皆さん、選手＝教員仲間に魅了される。結果＝目標として目指す生徒の学力や人間性、と考えられるでしょうか。しかし達成できない目標ではありません。

皆様が、自分で目標定め、前向き思考で、日々コツコツと努力を重ねておられる姿勢は必ず広がり深まるものと信じています。“ザ・プロ道徳教育専攻・研究者”を今後も目指されていかれることを心から願い、今後のご健康とご努力をお祈り申し上げます。

本当にありがとうございました。

これからお話しするエピソードは私が大学生の時のことなので 40 年以上前の出来事です。古典力学の授業で万有引力について担当教授が説明後、「何か質問はありますか？」の問いかけに、私の左手前方に座っていた友人がすかさず手を上げて質問しました。「質量のある物と質量のある物はその重さに比例し、距離の二乗に反比例して引き合うことは分かりました。僕が疑問に思うことは、何故、質量のある物同士は引き合うのかということです。どうしてですか？」と。すると、教授は、「なかなかいい質問だね。」と友人を褒め、少し間を開けてからゆっくりとした口調で「そのことを知っている方が一人だけいるんだよ。」と、実に興味深い回答をしたのです。私たち学生は、身を乗り出すようにしてその教授の口元を凝視し発言を待っていました。教授はおもむろに「実はねえ・・・、その方とは宇宙の創造者である神だよ」。この言葉が発せられると、若干の笑いとため息がもれたことをよく覚えています。教授は続けて、「何故、物と物が引き合うかは分からない。ただ、万有引力の法則を前提に計算していけば、月にだって行って帰ってくることができる。ニュートン以前は物が落ちるということは理解していたけれど、公式として表すことはできなかった。その分からなかったことを明らかにしたのがニュートンだ。もしかしたら、物と物とが引き合う原理が、いつかは分かるようになるかもしれない。その分からないことを明らかにしていくのが科学であり、研究者の使命なんだ」と。

私たちが生きている世の中には分からないことが数多くあります。自然科学に一例をとると、物が引き合うこともそうだし、宇宙の果てはどうなっているのだろう、あるいは、20 世紀前半に物質の最小単位である原子についての構造は明らかになりましたが、さらに小さいクォーク、医学のことでは脳の構造、生命の起源等々あります。一方、人文科学に目を転ざると、人間とは何か？ 私たち（私）は、どこから来たのだろうか？ どこへ行くのだろうか？ 何のために生きているのだろうか？などと人間に関することだけで数多くの問い（疑問）が思い浮かびます。これらは、古今洋の東西を問わず、人間が英知を絞って追求してきた課題です。

研究者はこれらの問い（疑問）に真摯に向き合い努力を重ね分からなかったことを考究し解明してきました。もちろん、まだまだ分からないことや、明らかになったとしても新たな疑問が生じることもあります。自然科学であれば、解き明かされた解は唯一無二のものが一般的であるかもしれませんが、しかし、人文科学の場合の解は一つではなく複数あることも結構あります。シュプランガーは、人がどの価値に重きを置いているかで 6 つの類型分類（理論型、経済型、審美型、宗教型、権力型、社会型）を示しました。これは、どのような価値を志向しているかという問題であり、人の生き方そのものです。このような場合の正解は唯一無二ではなく一人一人にあった解を見つけていくことになるのでしょう。まさに、最善解や納得解ということだと思います。人文科学の魅力は解が複数あることかもしれません。

自然科学と人文科学では、唯一無二か複数の解答かで到着点は多少異なるかもしれませんが、分からないことを明らかにしていくことが研究者目線であり研究の本道だと考えます。常に研究者目線をもち、分からないことを明らかにしていこうと意識をもっていくことで、学問は進歩していくのだと思います。教育学もしかりです。分からないことを明らかにしていくという意識や姿勢、そして努力が大切です。このことは、苦しみも伴いますが、実に楽しいことですし、そして、最終的には子供たちに還元されることとなります。

お祝いの言葉

一期生の皆さん、ご卒業、誠におめでとうございます。道德教育に特化した日本で初めての大学院。皆様は、栄えある一期生として2年間の歳月をかけ、見事に研究をまとめられました。土曜日だけの授業という大変厳しい条件にもかかわらず、常に意欲的に取り組まれる皆様のご熱心な姿は本当に素晴らしいものでした。新たな世界を切り開くのだという情熱とご努力には本当に頭が下がります。

私は、小学校の授業演習という形で4名の先生方と一緒に勉強することが出来ました。毎週授業の準備をしたり、先生方の素晴らしいご実践を伺ったりすることがとても楽しく、わくわくする時間でした。何より率直に自分の考えを披露し合えたことが私にとっても宝の思い出となりました。

さて、話は変わりますが、学校現場では、小中学校共に道德の教科化が軌道にのり量的確保が順調に進んでおります。しかし、授業の質の向上については大きな課題があるように思います。教科書と指導書を使った授業は、すでに形式化し始めているのではないかという危機感さえ感じております。

今後、卒業生の皆様はそれぞれに尚一層、道德教育の指導的立場でご活躍されることと思いますが、皆様の優れた知見を、多くの学生・先生方の育成に役立てていただけることを祈念しております。

時代はますますグローバル化が進んでいますが、世界は「共生」よりも「分断」が大きな課題となっております。なぜ、人は「共生」を望みながら「分断」へと進んでしまうのか。子どもでもわかることがなぜ大人は出来ないのか。本当に悩ましい限りです。道德は、「(共に) よりよく生きる」ことについて学ぶまさに生き方の学習です。そして、それは子どもに教えるものではなく、私たち大人が「自身の生き方」として、共に考えていかなければならない課題だと思えます。

新しい学習指導要領の柱の一つは、「学びに向かう力、人間性等」です。「道德科」の大切さをもっと多くの先生方に知っていただく上でも卒業生の皆様の使命は大変大きなものだと感じております。

最後になりますが、私は先生方の知見はもちろんですが、お一人お一人の優れた人としての姿にも尊敬の念を抱いております。今後いかに、AIが発達したとしても、人は人によって育つものだと思っております。まさに皆様はそのリーダー的存在だと確信しております。

先生方の今後のご活躍を心より祈念して、一言お祝いの言葉とさせていただきます。
本当に、ご苦勞様でした。そして、ありがとうございました。



令和2年3月7日(土)

学校教育研究科 講師 広中 忠昭

